

樺太での戦争体験を振り返って

林 紘司

昭和 16 (1941) 年 5 月に国民徴用令を受け、軍属として横須賀の海軍航空技術^{しょう} 廠（戦闘機に搭載する兵器を製造・実験する工場）支廠射撃部に入廠した。塩場寮寄宿舍でその後 3 年ほど暮らした。

同年 12 月 8 日、大東亜戦争が勃発。ハワイの真珠湾奇襲によって日本軍は緒戦優勢。廠内には軍艦マーチが流れるようになった。

昭和 18 年 4 月、国民徴用が 2 年延期となる。同年 7 月、適齢期未満陸軍現役志願（1 年早く満 19 歳で応募する）甲種合格。

昭和 19 年 2 月、稚内に集合し、南樺太のソ連との国境付近の^{けとん} 気屯^{けとん} に行き、歩兵第 125 連隊第 1 機関銃中隊に入隊・駐屯した。昭和 20 年 2 月に約 1 年間の初年兵教育・下士官候補教育を終了した。

5 月、^{かみしすか} 上敷香、泉部落の陣地構築作業に従事し、生まれて初めてモッコ担ぎを経験した。

国民徴用令（こくみんちょうようれい）

昭和 13 (1938) 年 5 月に施行された国家総動員法に基づいて、昭和 14 年に制定された勅令（ちよくれい）。戦時下の軍需（ぐんじゅ）を中心とした重要産業の労働力を確保するために、厚生大臣に対して強制的に人員を徴用できる権限を与えた。これにより国民の経済生活の自由は失われた。昭和 20 年廃止。

軍属（ぐんぞく）

軍に所属しているが、戦闘員（武官や徴収された兵）ではない者の総称。陸海軍文官、雇員（こいん）、傭人（ようじん）に分けられる。陸海軍文官は官吏であり、文官、教官、陸士海兵等の教授、特殊技術をもつ技師、法官、通訳官、陸海軍看護婦長などをいい、雇員は、技工士、調理士、裁縫士、医務助手など、傭人は操船手、軍用郵便手、裁縫手、割烹手、理髪手、洗濯手などがいた。

モッコ

縄などを網状に編んだ運搬用具。

6月、幹部候補教育隊助手を任命され気屯教育隊付けとなる。

8月9日、ソ連軍が越境し、日本軍に宣戦布告。初年兵は原隊に復帰し、助教（教育担当の熟練の下士官）・助手は気屯に残留、杉木中尉の指揮下に入り兵舎、橋梁、飛行場の警備に当たる。8月14日、敵ソ連軍の戦車が八方山を越えて古屯兵舎に攻撃を加えてきた。

迫撃砲・山砲等の火砲や戦車、飛行機の猛攻が迫ってきた。我が方には航空機も戦車もなく、山砲一門のみでソ連軍に対処した。南下してきた戦車に損害を与えることができた。ソ連軍は二枚羽の航空機で、自動小銃を打ちまくり反復攻撃を繰り返した。八方山の戦場で小林大隊長・浜田中隊長が戦死したとの報が届いた。

8月16日、我が軍の飛行場東方より、ソ連軍の大型戦車が雑木林を倒しながら進撃してきた。空陸一体の猛攻に、我が方は甚大な損害を受けた。この攻撃で私は「左腕貫通破片創」の負傷をし、古屯・気屯の負傷者と共に上敷香へ搬送され、一時治療の上、豊原陸軍病院へ転送され、左腕を切断した。

8月19日正午、我が部隊は降伏し武装解除。この時、ソ連軍に引き渡すため、兵器を集積し、気屯の戦いは終わった。

9月末、私は傷の治療後に民間人となり、自分を含めた4人が、豊原郊外の草野牧場（ソ連軍に接収され、ロシア人が管理していた）で使役されることになった。

足が不自由な2人は乳搾り、手が不自由な2人は牛の放牧管理を行った。宿舎などは与えられなかった。4人の内1人は樺太出身者で、しばらくして牧場を脱走してそのまま帰らず、残った3人で約2年間、牧場の隅の倉庫内で暮らした。昭和22（1947）年11月30日、引き揚げ船「北鮮丸」にて真岡を出港し、函館に上陸、復員した。

今考えるに、戦争とは人と人との殺し合い。撃たれたら撃つ。当時は兵隊も馬も、一発の銃弾で転がる運命。勝っても負けても人の命は帰らない。私は負傷のみで復員出来て、今日まで生き延びた事を喜んでいる。

復員（ふくいん）

本来の意味は、軍隊の体制を戦時から平時に戻し、余分に配置している軍人を待機状態にすること。日本においては、戦後、解隊された軍を除隊することも復員と解釈された。

昭和 27（1952）年に日本傷痍軍人会が設立され、昭和 37 年に、北海道傷痍軍人会美唄支部を設立（35 名で発足）。平成 20（2008）年に、会員減少により解散している。

（はやし ひろし 大正 13（1924）年 美唄生まれ）

※本稿をお書きになられた林紘司さんは、平成 27 年 11 月にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈りいたします。本稿は、ご遺族のご好意により掲載いたします。

傷痍軍人（しょういぐんじん）

戦争によってケガ等を負った軍人のこと。戦傷は身体に重大な障害を残すことが多く、復員後の生活や健康に影響を与えた。日本においては、日本傷痍軍人会（平成 25（2013）年に解散）が中心となって、傷痍軍人の生活の援護と、福祉増進事業を行った。